

子どもの遊戯と教育の関係

青木美智子

はじめに

「子どもの遊戯」とは一体どのような活動なのでしょう。もちろん子どもの遊戯に関する研究は発達心理学的な実験・観察に基づいた方法をはじめ、精神分析的、歴史社会的、文化人類学的あるいは現象学的観点からと、多方面から行われ、さまざまな成果が報告されています。これらの研究は子どもの遊戯に起こっているできごとの一つひとつに、解釈を与えてくれています。そしてわたしたちが子どもの遊戯の風変わりな様子を、どのように受け止め、支えていったらいいのかについて考えるとき、ある確かな拠り所となってくれています。

でもわたしが今あえて問うてみたいのは、わたしたち大人が、子どもの遊戯という活動を眺める場合にいつでもわれ知らず立ち戻っている、考え方の大きな枠組みなのです。言ってみれば冒頭の問いは、「わたしたちは子どもの遊戯を、どのような活動としてとらえてきたのでしょうか」ということになります。

全く当たり前のことですが、子ども自身は自分が遊んでいるとか、それが一体どういう状況なのかについて、深く考察することはまずありません。子どもの遊戯に何かしら意味を与え、この活動をことさら問題に始めたのは、いつでも大人の側で、言ってみれば、子どもの遊戯をめぐる、大人の解釈次第なのです。

おもしろいことに、「子どもの遊戯」について大人

たちがあれやこれやの考えを巡らせる場合、いつでも「教育的な」観点から出発している、ということができません。「子どもにふさわしい遊びは何か」、「どんな遊びをさせるべきか」、という問いは、子どもにとつて遊ぶことが、何かしらの意味をもっている、と考えるところから発しています。そして、この意味を損なわないように、また、はぐくむようにするにはどうしたらよいのかと考えることは、まさしく子どもの遊びを教育的な配慮から考察することにはかなりません。つまり、子どもの遊びについて考えることが、実は教育について考えることと分かち難く結びついているのです。

この子どもの遊びをめぐる大人たちの試行錯誤の跡を、外国の古い文献にさかのぼって調べていくことは、意味のある作業に思われます。というのも、わたしたちは、現代日本という、あまりにも当たり前の地点から、現代の子どもの遊びを眺めては、今の子どもは遊べなくなってきたりとか、子どもの遊びが変

わってしまったとか、右往左往しているばかりです。そしてそのたびに子どもたちは、良くも悪くも巻き添えを食うのです。でももし、わたしたちが時代も国も異なる視点からもう一度今の子どもの遊びを眺め直すことができたなら、今わたしたちが問題だと思っているあらゆる事柄は、別の形で見えてくるかもしれません。あるいは問題だと思っているわたしたちの考え方の根っこにあるものを、掘り当てることができるかもしれせん。

これらのことを確かめるためにも、わたしが研究している、西洋の、子どもの遊びをめぐる昔の議論に、しばし、おつき合いいただければと思います。

「子どもの遊び」の発見と教育への利用

子どもの遊びそれ自体はいつの時代にもあった活動のようで、このことは、文化史的な研究が、絵画や詩、おもちゃの出土品など豊富な事例によって明らかにしてきました。しかし、大人の側が、子どもの遊び

に何かしらの教育的な意味を自覚し、問題にし始めたのは、近代に入ってからのことでした。実は西洋の伝統的な考え方においては、古代から近代の初めまで、「遊び」の地位は極めて低いものでした。日本にも古来「児童」という言葉がありますが、それは子どもの遊びそれ自体、あるいは幼稚なことを指します。「児童に等しい」といえば子どもの遊びと同じこと、すなわち少しも価値の認められないことを表しますが、まさに西洋においても、遊びに対してこれと似たような考え方が長く続いてきたといえます。

それだというのに、少しも価値のない活動だと当時一般には思われていた子どもの遊びに、初歩的な学習へと結びつけることができるような、教育的な意味の入り込む余地が見出されるようになったのです。このことは、子どもの遊びに対する大人たちの見方を大きく変えました。

この時注目されたのは、遊びへ向かう子どもたち

の、自ら進んで取り組む嬉々とした様子であり、またそうして始めた活動を、熱心に根気強く続ける力でした。この事実に気づいた大人たちは、子どもの遊びをよく観察して、分析しました。そして子どもが遊ぶ時に、これほど積極的で、生き生きとしているのは、遊ぶことそれ自体が楽しいからで、この楽しさの源にあるのは、子どもたちがあらゆる強制から「自由であること」だと突き止めました。

しかし当時はまだ、子どもが生き生きとしていればそれで良い、という子ども観は成立しておらず、子どもはできるだけ早く子どもであるという時代をくぐり抜け、大人になることが重要だと考えられていました。そのため大人たちは、子どもの遊びをそのまま自由にはおきませんでした。この遊びの楽しさの源である「自由」を、大人のコントロールによって導こうと考えたのです。つまり、子どもには自由に遊んでいる、とうまく思わせておいて、実は大人がこの

遊びをこつそりと、読み書き算といった意味のある学習活動に導き入れてしまう、という巧妙な方法を考え出したのです。

それまで子どもは鞭で脅され、机の前に座らされてつづり字を覚えさせられていたのですが、今や、楽しくカードゲームをしているうちに、いつの間にか正しいつづり方を覚えてしまっている、という方法が用いられるようになりました。

子どもの遊びの教育的な利用方法が、発明されたのです。

小さい子どもにとって、じつと机の前に座っているのは苦痛なことです。それが遊戯的方法を用いることによって緩和され、いやむしろ楽しいものとなり、学習効果も上がるとすれば、これは画期的な方法であったと思います。子をもつ親たち、良家の子息を預かる家庭教師たち



は、この方法に夢中になりました。国を統べる王や領主たちは、この新しい教育方法のための実験学校に、資金を提供しました。

その結果、この時期、実にさまざまな遊戯的学習方法が考え出され、これがヨーロッパ中に伝播し、互いに影響を与え合いました。当初どのような遊びが教育的に利用できるのか、が大人たちの問題になっていましたが、そのうち、子どもの遊びのありとあらゆる活動が、分類され、整理され、驚くべきことに、とうとう全ての子どもの遊びが、教育的配慮のもとに組み立て直されることになりました。

遊びの意味の問い直し

子どもの遊びの教育的利用が極端に押し進められ、もはやこれ以上はあり得ないと言うほどの頂点に達した時、当然のことながら、これに待ったをかける声が上がりました。子どもの遊びは、何かしら教育的な効

果と結びつけられるから意味があるのではない。そうではなく、子どもが遊んでいることそれ自体が意味のある活動なのだ、というのです。大人たちは子どもの遊びから取り上げてしまった「自由」を、再び子どもたちのもとへ返してやるべきだというのです。大人があればやこれやの方法を用意しなくても、もともと子どもは自由に遊びだすのだし、そのような遊びにこそ、人間の本性を形作るような意味が含まれているのだというのです。

このような考え方が現れてきた背景には、子どもに對する大人たちの考え方の、大きな転換がありました。子どもはかつてのように、早く子ども期をくぐり抜け、一人前になるべきだとする子ども観から、子どもは十分に子ども期を生きるべきだという考え方への移行があったのです。これには産業革命という大きな社会的変化がかかわっています。紙幅には限りがありますし、子ども観の変遷と社会の変化について、こ

こで十分に検討することができません。

さて、子どもたちは再び、好きな遊びを、遊びたいと思う場合だけ、遊びたい間だけ遊ぶ、という自由を、大人たちの手から取り戻しました（いや実際のところは、大人が勝手にそう考えていただけで、子どもたちのほうは、そんな事情とはお構いなく遊んでいたのだとは思いますが）。

大人たちはいまや、自由に遊びほうけている子どもたちの姿から、さまざまな解釈を打ち立てるようになりました。何よりも大きな発見に思われたのは、遊びに没頭している子どもたちの、生き生きとした姿にほかなりません。大人たちはこれにはっとさせられたのです。大人になった今となっては、もう、こんなふうに遊ぶことはできません。取り戻すことのできない子ども時代。あのころの遊びの無心さ、あの熱中ぶり、喜び、生命力そのものといった様子が、子どもの遊びが、今度は「神聖な活動」として、大人たちの注目を

集めるようになり、この時期、絵画や彫刻あるいは詩など、芸術の格好のモチーフになりました。

遊びの教育学の誕生

今日でもわたしたちになじみ深い、幼稚園（キンダー・ガルテン）を創設したフリードリヒ・フレーベルの思想もまた、このような時代背景のもとに生まれてきました。つまり、フレーベルの思想は、子どもの遊びが、大人の遊びとは全く異なる活動だという見方から出発しているのです。大人にとつての遊びというのは、まじめな労働に対する余暇やリクリエーションの意味もっています。でも子どもは、とりわけ乳幼児期の子どものいうのは、いまだ大人にとつての労働に当たる生活の軸をもつていません。彼らは寝たり乳を飲んだり泣いたりしている以外の時間を、遊び暮らしているのです。では一体どのように遊んでいるのでしょうか。フレーベルは乳幼児をつぶさに観察して、

深い思索を繰り返しました。この時期の子どもというのは、遊びながら実に多くのことを発見し、探索し、記憶し、瞬く間にいろいろなことを学び取り、明日への糧としています。そこでフレーベルは、この時期の子どもが遊ぶとはどういうことなのか、そして大人たちはこの遊びを、どのように守り、はぐくめばいいのか、を教育の問題として考えたのです。フレーベル自身の言葉では、「遊びの保護養育」(die Pflege des Spieles)といいますが、フレーベルはこの理念に基づいて、子どもの遊戯を哲学することを始めたのです。

このことは、子どもの遊びをはじめから「児戯」に過ぎないと低く見下し、それでも何かしら学習と結びつけることで意味を見出してきた、遊びと教育のあの関係とは全く異なっています。当初教育は遊びから何かしら利用可能なものを取り出そうとしていたのです。しかしフレーベルに至っては、子どもの遊びそのものが既に教育の課題なのです。つまり、生後二か月

の赤ちゃんが、どういう玩具によって、どのように遊ぶか、そしてこの遊びがどのように展開していくのが、教育の課題として考えられているのです。遊びが学習より一段低い活動ではなく、遊びこそが人間形成の中心なのです。

こうしてフレーベルは、乳幼児期の遊びそのものを一から組み立てていきました。従って今日でもなお、乳児の手のひらにぴったりと収まる柔らかいボールに、幼児の最初の簡素な積み木に、色とりどりの折り紙遊びに、あるいは幼稚園で行われている唱歌遊戯に、フレーベルのアイデアの名残を、見て取ることができます。

「遊びながら学ぶ」から「遊ぶことを学ぶこと」へ

子ども期の遊びが教育活動の中心点に引き寄せられたこれより後、遊びの中で経験される事柄は、大人たちの重大な関心事になっていきました。子どもの遊び

の中で「何が」、「どのような力がはぐくまれ得るのか」という問いから出発し、今度は「どうすればそのような力をはぐくむことができるのか」という方法が求められるようになりました。ということは、かつて教育が子どもの遊びを学習へと利用していたころのように、「遊びながら学ぶ」という遊戯—学習の緩やかに結ばれる関係ではなく、「遊ぶ」という事柄そのものを、教育的観点から学び直さなければならなくなつたのです。つまり「遊ぶことを学ぶこと」が求められる時代になつたのです。

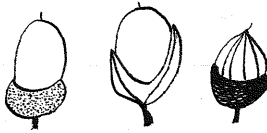
このような子どもの遊びに対する考え方は、子どもが遊ぶことにすら適切な方法が必要であり、そこから獲得されるべき何らかの成果があるかのような、教育としての遊びを印象づけました。こうして子どもの遊びはいまや学習と同じように、大人によってあらかじめ準備が整えられ、計画的に習得させるべき活動と見なされるようになりました。このことは、子どもの遊

びそれ自体を眺める大人の見方が、「遊びの教育化」と言えるほど大きく変わってきていることを示しています。

今日の「子どもの遊び」へのまなざし

従って今日では、子どもの遊びについてわたしたちが考える場合、もはや「遊びながら学ぶ」ことをめざすような、「教育の手段としての遊び」が問題ではなくなってきたています。なぜなら「教育の手段としての」遊びが問題になっているうちは、少なくともまだ「教育の手段にはならない」遊びの存在を、わたしたち大人が認めざるを得ないからです。

この時、実は何らの効用ももたらさないような子どもの遊びが、——つまり教育に利用可能な遊びというわたしたちの見方を相対化するような遊びの存在する余地が——残されていると言うこと



ができます。ところが、遊びにおいて経験される事柄そのものが問題となるのはいいのですが、その結果、遊ぶことそのものを最初から大人の教育的な配慮の対象と見なし、ここから獲得されるべき何物かがある、という遊びの教育化された現状に対しては、これとは異なる視点を提起するのがなかなか難しいように思われます。

ただ一つ言えることは、西洋の歴史的な遊戯観の変遷もまたそうであったように、大人たちの解釈の枠組みそれ自体では、現実の子どもの遊びを説明しきれなくなった時、これまでの解釈の変更を迫られるということなのです。今の子どもの遊びに対して、もしわたしたちが説明しきれない問題を見出しているのだとしたら、わたしたちの「子どもの遊び」に対する解釈そのものが、現状に追いつかなくなってきたということなのかもしれません。

(東京大学大学院)